

2011 まちづくり提案・感想文

○3年生

板谷 洋介

今回の学生によるまちづくり提案は、途中の参加メンバーの増加に伴う班編成があり、それによるテーマの決定段階で躓いてしまった。しかしながら、郊外型のデマンド交通の発表を行ったAチームのメンバーは団結力が強く、楽しみながら発表に至ることができた。今回のまちづくり提案では、直後にジョイント合宿が連続するタイトなスケジュールとなったが、中村先生や諸先輩方からアドバイスを頂いて、作成から発表まで充実したものであった。しかしながら、実際の発表に際してはいろいろな問題があったことも事実で、それらは反省点として真摯に受け止め、今後の学業に活かしていくために、主観的な内容ながら以下の通りまとめることとした。

まず、今回のデマンド交通の発表に関して、自分らしい、メンバーらしい着眼点に基づき論文を作成することができたと思う。先に述べたとおり、調査と研究の期間が短かったにもかかわらず、発想の意外性やスケールの大きさ、また実用化の可能性の点でも有効な論文であったと思う。しかしながら、提案発表に至る経緯でいくつかの問題点があった。まず、時間の制約により、提案する運行ルートを全部回れず、調査とインタビューが十分行えなかったこと。また、後からの加筆する時間も少なかったことなどは、悔いの残るものであった。また、メンバーが集まるためのスケジュール調整が難しく、論文の手直しや発表用のパワーポイントの作成、ポスターセッションの掲示物などの作成は、過去の発表を参考にすることや、経験している諸先輩に相談するなどの時間が十分ではなかった。これら一連の問題は、始めから本年度のまちづくり提案に携わり、年長者でもある自分の不徳の致すところであった。申し訳ない。以上のような問題があったにもかかわらず、この厳しい条件内で出来上がったパワーポイントとポスターセッションの掲示物は、細川氏と佐々木氏との尽力もあって、とても良いものができたと思う。

本番を迎えてから明らかになった問題点も多かった。まず、ポスターセッションは、郊外の観光地の魅力を前面に出す手法をとって、強いアピール力を持つものであったが、運行までの準備や必要な協力体制についての説明がなく、行政が以下に関わるかが明らかなものではなかった。また、論文の主旨である、郊外の観光地を繋げ、それに伴って観光客の流れを作り、さまざまな交流と活性化を生むという、提案したデマンド交通の波及効果についての説明がなかった。発表会の総評の段階でBチームの“宇都宮学のすすめ”が指摘されていた、アカデミックな要素が欠落しており、これは大きな失敗であったと思った。

発表の段階でもいろいろな問題があった。まず、用意した発表原稿の文字が小さく、そ

の上手元が暗かったために、いかにも原稿を読むという体勢になる状況であった。また、発表者の分担を決め、佐々木氏とパートを分けたことで手元を照らす照明から更に離れてしまい、落ち着いて発表に望むことができなかった。また、指定されていた時間の10分間は、準備を行う時間も含まれていたこともあり、残り時間が明確でなく、心理的な不安要素となった。発表の内容はポスターセッションでの失敗と同様、アカデミックな要素が少なかったと思った。宇都宮市郊外の観光資源の魅力を伝えることも大切だが、バスの具体的な導入方法や、波及効果のアピールなどが不足していたと思った。このような反省をしながら、発表は“待った無し”で進み、あっという間に終わってしまい、会稽の恥にまみれたという心境である。ただ、パワーポイントのスライドは作り込んであり、発表の進行と合わせて効果的なアニメーションが施されていたことで、提案の主旨を伝えるという点では、一応の及第点であったとも思った。

発表後のポスターセッションでは、予想よりも多くの人に関心を寄せて頂いて、多くの質問や導入に際してのアドバイスや意見を頂いた。また、郊外の観光地の魅力についての話題や、四季折々の宇都宮の魅力について話が弾むこともあり、取り上げた題材と我々の発想は、宇都宮を知るひとにこそ魅力が強く伝わるように思った。特に特筆すべきは、佐藤市長が強い関心を持って、長時間にわたり我々のブースで質問を投げかけ、意見の交換を行ったことである。これは、市政の視点からも興味深い提案として注目された証ということができるだろう。

以上、とりとめもなく雑感を書き記したような感想となってしまったが、来年度のまちづくり提案に取り組むゼミ生への引継ぎとして、いくつかのポイントを書き記しておく。一つ目は、まちづくり提案は市政の影の部分や主要施策のデメリットを補うなど、行政との関わりが強く求められる内容が良いように思った。今回のまちづくり提案で優勝したチームは、宇都宮市が進めるコンパクトシティ化の裏側にある、郊外に増加する空き家を活用するまちづくり提案であり、郊外の空き家の増加の実態について統計と実地調査でリアルな現状を踏まえていた。また、他の地域の空き家対策を効果的にまとめて発表に盛り込んでおり、論理的な構成になっていた。二つ目は、既存の取り組みにプラスアルファの要素で大きな効果を生む提案とする方法である。今回準優勝した、我々がBチームの発表も、宇都宮を学び、それを発信するというプラスアルファの新しい要素が認められた点は、今後の参考とすべき提案といえるだろう。我々の提案も、市街地を巡る『きぶな』の発展版という要素や、郊外の観光地をコラボレーションするという、プラスするという手法であるともいえる。われわれAチームの場合、もう一步、もう二歩と論文を深め、構成を煮詰めることで、更に良い提案になったと思う。まちづくり提案に適した独特の理論構成で、バランスの良い発表を行うことが肝要であると思った。

最後に、さまざまなアドバイスと温かい励ましのお声掛けを頂いた中村先生、院生の皆さん、4年生の諸先輩方、そして奮闘したメンバー全員に心からお礼とお詫びを申し上げます。

佐々木 舞

今回のまちづくり提案はわたしにとって初めての大きな場での発表となりました。デマンド交通の発表に至るまでには同じチームの板谷さんや細川さんがなかなか時間を取ることのできない私の分まで大変な作業を引き受けてくださり、本当に申し訳なかったというのが一番の感想です。それでも、実際に現地を見て回ったり、発表原稿とパワーポイントを照らし合わせてどうすればよりインパクトの強い提案になるか、どうすればより実現したいと思わせるかを話し合ったりと、できる限り参加することでまちづくり提案を通してプレゼン力を身につけることができました。このまちづくり提案では、プレゼンにおける自分の長所と短所の発見もすることができました。また、ほかの提案を見ることで自分たちとはまた違う視点での地域活性化へのアプローチを見ることができ、とても面白かったです。このような場を与えてくださった市役所の方々や祐司先生、ありがとうございました。

田崎 亜季

市へのまちづくり提案のテーマ設定には紆余曲折があった。「市民に地域の良さを知ってもらおう、そして市民で課題を共有することで地域に誇りや未来への希望がもてるようにしよう」という思いが提案の根幹はぶれなかったのだが、それを達成するための方法がいくつも挙げられ、「地域の歴史ブランドを高めるサイトの構築」、「異文化圏の人に地域の良さを伝えるイベント」など様々なアプローチを経て、「全国の地元学の一步先を行く宇都宮学」というテーマが確立されていった。

テーマが確立した後も、学問をどのような視点から提案するか、行政と市民の役割はどこか、どのように学問を市民に広げていけばいいのか、などいくつもの課題が出てきて、自分の知識だけでは限界を感じた。提案の細部をみると考えが甘い部分が目立ち、現状分析をより突き詰めるべきだったと今になって思う。

このように難航したまちづくり提案であったが、その過程で得たことは大きかった。地域の良さや未来への希望は誰かから与えられるものではなく、自分の中から作り出すものだ、ということが分かったからである。

正直、宇都宮市に実際に足を運ぶまでは「元気な町」というイメージが乏しかったが、住んでみて「ここは住みやすい」と感じ、まちづくり提案の調査を進める中で「この町は元気だ」という確信が持てるようになった。

それは、市役所職員の方、国際交流センターの方、そして中村祐司先生に、市で行っている地域活性化にむけた取組みを伺う中で、「本当にこの町を大事に考えているんだな、すてきだな」と感じられたからである。また、この「まちづくり提案」という施策をとっ

てみても、市民が地域を考え、発信しやすい場所が宇都宮市には整えられていることがわかる。今後も地域を大切に思う市民が「まちづくり提案」によってより増えていくことを願う。

成澤 友里

まちづくり提案に参加したことは、非常に貴重な経験だったと思います。私達のチームは「宇都宮学のすすめ」ということで提案しましたが、そのテーマにたどり着くまでに大変苦労しましたし、テーマが決まった後も提案の細部まで詰めるのにとっても時間がかかりました。というのも、私達の調査不足で、考えた提案が政策として、既に市によって行われているということが多かったためです。その度に、自分達の調査不足を後悔するばかりで、投げ出したくなることもありましたが、先生や先輩方、何よりゼミの仲間に支えられ、沢山のアドバイスを頂き、提案を完成させることができました。本当にありがとうございました。

まちづくり提案の発表当日は、ポスターセッションで他大学の提案を聞いたり、市役所職員の方や外部の方に私達の提案について直接アドバイスや意見を頂きました。中にはかなり厳しい意見をおっしゃる方もいらっしゃいましたが、そのおかげで、ジョイントの分科会ではさらに良い提案にすることが出来たと思います。

優勝した提案は、私から見ても納得するものでした。提案内容、パワーポイント、プレゼンの仕方など、学ぶべきことが多かったと思います。まちづくりに参加して、優れた発表を多く見ることが出来たこと、自分達の提案についてアドバイスを頂けたこと、市役所の方にインタビューして様々なお話を伺えたことなど、普段できない経験を沢山することが出来て良かったと思います。これらの経験を卒業論文でも生かしていきたいです。

細川 いずみ

何を提案しようか、自分たちのテーマを決めるまでが一番難しかったように感じます。私たちが暮らしている宇都宮市に、何が足りないのか、此处で何ができるのだろうか、深く考えられる良い機会でした。宇都宮には沢山の魅力があるのに、それぞれの繋がりが無い、というのが最初の印象です。そして、その「繋がり」を「バス」という公共の交通機関を使って生み出すという発想は、私一人では到底思いつかないユニークなものでした。また、実際に郊外の観光地を巡り、今まで知らなかった宇都宮市を、そしてそこで頑張る人々の努力を知ることが出来ました。論文作成・発表用スライド・ポスターセッションなどの準備の中で、他者に伝えること、訴えかけることの難しさも経験しました。本番当日

は、他の参加チームの着目点に驚かされるばかりでした。また私たち自身も、10 分間という限られた時間の中で精一杯頑張ることが出来たと思っています。ポスターセッションの会場には、郊外観光地の魅力をわかりやすく紹介した地図などを掲載しました。多くの方が見に来てくださり、「ここも面白いぞ」「あそこは外せないよ」などアドバイスを多く頂き、私たちが考えた循環ルートがより濃密なものとなっていくのを見て取れました。これこそが私たちの考える「デマンド交通」の姿なのではないのかな、と発表後もひしひしと感じていました。

結果、入賞することはできませんでしたが、目標としていた「愉しんでやる！」というのは達成できたので個人的にはとても満足しています。調査に協力していただいた方々、ご指導いただいた先生や先輩方、チームとして意見をぶつけ合うことができた板谷、佐々木に感謝しています。本当にありがとうございました。

○ 4 年生

秋山 果歩

発表者のみなさん発表お疲れ様でした。途中から参加したので、デマンド交通の発表が見られなかったのが残念でした。研究室で熱心に打ち合わせなどしていたのできっと素晴らしい発表ができたのではないのでしょうか。宇都宮学のすすめの発表もとても良かったです。入賞おめでとうございます。今回の経験は今後必ず役に立つと思います。本当にお疲れ様でした。

佐々木 真美

発表者の皆さん、まちづくり提案発表会お疲れ様でした。宇都宮学班の皆さん、第 2 位入賞おめでとうございます。アカデミックに丁寧に取り組んだことが評価されてよかったですね。デマンド班の皆さんからは、本当にこの提案を市に実行してほしいと思っていることが強く感じられ、発表者が楽しんでいる様子が印象的でした。皆さんが夜遅くまでポスターやパワーポイント作りをする姿をずっと見ていて、私自身の卒論執筆に良い刺激を受けました。皆さんの努力は、これからの学生生活で必ず生きてくると思います。

発表会全体を通しての感想は、昨年疑問に思った市のやり方が今年も変わっていなか

ったことが少し残念でした。また、発表者はスクリプトに頼らないでプレゼンができたほうが良いなと改めて感じました。

酒井 理恵

発表者のみなさんお疲れ様でした。「宇都宮学」班のみなさん、2位入賞おめでとうございます。発表前緊張していたようですが、とてもいい発表だったと思います。

「デマンド交通」班のみなさんの発表も、見ごたえ・聞きごたえ十分で、終始頷きながら聞いていました。他大学の発表も大変勉強になり、卒論執筆に活かしたいと思います。

今回、チームで協力して取り組んだことはこれからの学校生活で必ず役立ちます。本当にお疲れ様でした。

中村 佳代

今回のまちづくり提案では、「宇都宮学のすすめ」ということで教育分野に関する提案を行った。

3年生のサポート役として、宇都宮市役所学校教育課の方や国際交流プラザの方にインタビューをし、現状を把握するところからスタートした。「学ぶ」、「共有」、「発信」と3つのステップを施策事業の提案とし、市民と市役所職員と学生が一体となったカリキュラムを行うという新たな発想を生み出した。

当日では、ポスターセッション進行役として、市の職員の方や一般市民の方々に説明をし、そこから意見交換で学んだことが大きかった。中でも、印象に残ったエピソードは、宇都宮大学の学生が講師である市民・行政と受講者をつなぐパイプ役としてイベントを進行するコーディネーター役で活躍する発想が非常にユニークであることを称賛して頂いた点である。宇都宮学の発信から宇都宮市の更なる魅力が高まることを期待している。

最後に、本番前のリハーサルまで何度も試行錯誤をして、質の高い発表を行った3年生達を高く評価したい。そして、ご指導して下さった中村先生や、アドバイスをくれた4年生や院生の方、インタビュー活動を行った際にお世話になった方々、当日、見に来て下さった一般市民の方やご指摘やアドバイスをして下さった市役所職員の全ての方々に感謝している。本当にありがとうございました。

○院生

白 宝花

まちづくりに参加した皆さんお疲れ様でした。特に3年生の皆さん本当にお疲れ様でした。非常に印象的で素晴らしかったです。最後は第2位の表彰を受けて、本当におめでとうございます。

南 勇文

3年生の皆さん、まちづくり提案お疲れ様でした。今回は2回目ですけど、今年度も研究室より2グループが参加し、みんな頑張りました。修論にもいい勉強になりました。中村先生まちづくり提案を参加させていただき、ありがとうございました。

陳 懐宇

まちづくり提案を終えた三年生のみなさん本当にお疲れ様でした。二つのグループの発表は大変わかりやすいまとまった内容にできているという感想を持った。二つのグループが作ったポスターは非常にすばらしいと思います。この経験を生かしてぜひ卒業論文と就職のほうも頑張ってください。

舘野 治信

今年の発表は、全般的に新鮮な印象を持って聴きました。それは、例年に較べハードづくり重点・イベント開催偏重ではなく、ソフト的思考が強かった点にあったのではないかとおもいました。行政学研究室の「宇都宮学」は、その代表選手で、内容・プレゼンとも非常に良い出来でした。ぜひ、宇都宮のまちづくりに活かしていただきたいものです。もう一つの「交通システム」も、今一步で受賞を逃しましたが、とても良い提案でした。

今回の提案経験を今後に大いに活かして下さい。

宇都宮大学国際学部行政学研究室担当教員

中村祐司

明るさ、ユーモア、チームワーク

ジョイントと同様、まちづくり提案についても、前期の段階で参加ゼミ生を確保するのは相当大変だ。学部カリキュラムの関係で国際学部の学生は前期にゼミを2つ取るので、前期ゼミはいわば「準授業科目」と位置づけられており、受講生が後期もこのゼミを取るとは限らないからだ。

加えて、まちづくり提案に参加する価値は、どうしても一度経験してみなければわからない。毎年、4年生の助けも借りて、前期ゼミ生に教員から参加を促すのだが、どうしても説明では教員の言葉が踊ってしまうような雰囲気(うまく真意が伝わらない)となってしまう、なかなか期待する反応をすぐには引き出せないのが通例である。

いわば毎年、「生煮え」の状態から準備のスタートに入るわけだが、加えて、今年は提案発表会の日程が11月に前倒しになったことで、果たして間に合うのだろうか、正直焦っていた。

ところが、ここからがこの研究室の良き伝統なのだろう。いったん参加すると決め、やると決めればゼミ生のチームワークと追い込みの力には相当な迫力があり、明るさやユーモアを含む形で周辺に良好なオーラさえ漂わせていた。

2つのグループとも、テーマ設定を土壇場で変更し、確かにはらはらさせられたものの、調査先聞き取りやメンバーの集まりの調整、さらには役割分担など、端から見ても明るく一体となっていて、それでいて変に誤魔化さない形で、真正面から諸課題に向き合っていた。

発表当日は、あいにく入試業務とぶつかってしまったが、意地で自転車をとばし会場に駆け付け、研究室所属の1グループの発表を聞くことができた。ポスターセッションでも堂々と説明していて、やり遂げた者特有の爽やかな雰囲気があった。

賞の獲得は講評にもあったように、紙一重の差であっただろうし、献身的な4年生や院生の協力も含め、ここまで頑張ってきたこの数カ月のプロセスに、ぜひ胸を張ってほしい。会場では研究室OBや知り合いの自治体職員とも久しぶりに再会できた。このような貴重な機会を得られたのも、市政研究センターの一過性ではない事業継続への安定的な政策スタンスと、宇都宮大の他学部・他研究科、県内他大学の研究室の参加継続があるからこそで、すべての関係者に感謝したい。